様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００００６４

研究課題名（和文）古代ウイグル語『金光明最勝王経』の訳注研究

研究課題名（英文）Study on the Altun Yaruk Sudur (Suvarṇaprabhāsottamarāja-sūtra) in Old Uyghur

研究代表者
橘堂　晃一（KITSUDO, Koichi）

龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：００５９８２９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：Altun Yaruk Sudurは、義浄訳『金光明最勝王経』巻第四「最浄地陀羅尼品第七」からの古代ウイグル語訳である。しかし、そこには原典には存在しない挿入文が３分の１を占めている。本課題では、第四巻の校訂テキストを作成しつつ、挿入文の思想的背景を明らかにすることを目指した。その結果、大乗基（窺基）によって大成された法相宗文献、『瑜伽師地論』、『成唯識論』、『大乗法苑義林章』からの引用文であることがわかった。このことから翻訳者・勝光闍梨都統の思想、ひいてはウイグルにおける唯識学派の存在を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古代ウイグル語訳Altun Yaruk Sudurの研究は、もっぱらテュルク語言語学の対象として進められてきた。言語学者による研究は、漢文原典と対照することが中心となり、語彙や音韻学の面で大きく進捗した。しかし、漢文原典に存在しない唯識思想の注釈文に対しては、強引な翻訳に終始するのみで、そこに潜む仏教学的な意義については等閑視されてきた。
本課題の成果により、唯識思想に基づく挿入文の原典と思想的背景を明らかにすることによって、より精密にテキストを読解し、信頼できる訳注テキストを作成することできた。これにより、古代ウイグル語に精通しない仏教学者にも利用できるテキストを提供することが可能となった。

研究成果の概要（英文）：Altun Yaruk Sudur is an ancient Uighur translation from the Gijo translation of the Golden Light Most Venerable King Sutra, Volume IV. However, one-third of the text contains the commentaries that does not exist in the original. In this project, we aimed to clarify the ideological background of the inserted sentences while preparing a revised text of Volume IV. As a result, it was found that the texts are quotations from the scriptures attributed to Faxiang school compiled by Kuiji (窺基), namely, Yogacarabhumi 瑜伽師地論, Chen Weishilun 成唯識論, and Dacheng Fayuan Yilin zhang 大乗法苑義林章, so on. From this, we were able to clarify the thought of the translator, 勝光闍梨都統 Singko seli tutung, and by extension, the existence of the Yogacara school in the Uyghur kingdom.

Translated with DeepL.com (free version)

研究分野：仏教学

キーワード：古代ウイグル語　金光明最勝王経　唯識　法相宗　勝光闍梨都統

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

モンゴリアから天山山脈東麓に移住したウイグルが、それまで信仰していたマニ教から仏教へと改宗したのは、9 世紀後半と考えられる。以後 15 世紀にイスラーム化するまで、ウイグル仏教は周辺地域の仏教と密接に関わりながら展開する。その具体的様相は、主としてウイグル語の仏教写本に認めることができる。

本研究課題は、義浄訳『金光明最勝王経』の古代ウイグル語テキスト（ウイグル語：Altun Yaruk．以下，AY とする）を対象とする。「金光明経」類は、個人の側では懺悔滅罪思想として、国家レベルでは鎮護国家を司る経典として、東アジア諸地域で大きな役割を果たしてきた。ウイグルも改宗後、比較的早い段階でこれを受容した。本経の翻訳者、ウイグル僧・勝光闍梨都統（シンコ・シェリ・トゥトゥング）は、10 世紀～11 世紀初頭に活動したウイグル僧である。したがって本経の訳出も彼の活動時期となる。勝光闍梨都統は、本経の他、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』をはじめとして、多くの経論を古代ウイグル語に翻訳しており、ウイグル仏教の形成に多大な影響を与えた人物との評価が与えられている。

AY には膨大な研究の蓄積があるにも関わらず、全体として現代語に翻訳されることなく今に至っている。ウイグル語訳には、義浄訳に存在しない注釈文が挿入されていることが、その最大の障壁となっている。報告者は予備調査を通じて、挿入された注釈文が唯識思想に基づくものであるとの見通しを立てた。

一方、報告者は、2011 年～2012 年度に採択された「ウイグル文 法相宗唯識文献の復元と研究」（若手研究 B：課題番号 23720029）において、通称 Lehrtext と呼ばれる、作者不詳の一つの古代ウイグル語文献が、様々な法相宗典籍を合揉したものであることを明らかにしている。本研究はその延長線上に位置するものである。すなわち、Lehrtext と AY とが同じ訳者の手になるとの見通しに立脚して、両文献の訳語を比較し、思想上の繋がりを明らかにすべきことに思い至ったものである。

２．研究の目的

本研究は、その校訂テキストを作成し、とくに注釈部分の和訳とその典拠を法相宗典籍のなかから探し出すことを目指す。さらにそれに基づき、翻訳者・勝光闍梨都統の思想背景と翻訳方法について、同時代の周辺の仏教思想と比較しつつ、ウイグル仏教思想の特質の一端を明らかにしようとするものである。

３．研究の方法

当初の計画では、ロシア科学アカデミー東洋文献研究所（サンクトペテルブルグ）を訪問して AY の写本を閲覧する予定であったが、コロナ禍、ロシアのウクライナ侵攻のため断念せざるをえなくなった。その代替として（財）東洋文庫に設置される同写本のマイクロフィルム資料によって校訂作業を進めることにした。

Ceval Kaya と Hacer Tokyürek 両氏のテキストを底本として、読み直しを行い、新たな校訂テキストと訳注を作成する。これと同時に注釈文の典拠を C-Beta や SAT の大蔵経データベースを駆使して見出す作業を行った。無論、敦煌写本や日本の古写本に確認される大蔵経未入蔵の古逸文献にも注意を払った。

作成した校訂テキストに基づき改めて古代ウイグル語語彙索引を作成した。とくに唯識思想に特徴的な用語を抽出し、それらを他の古代ウイグル語仏教文献の語彙と比較した。

４．研究成果

以上の方法に基づいて校訂テキストを分析した結果。AY には以下のような法相宗唯識文献からの引用が認められた。

あ　『瑜伽師地論』
い　『成唯識論』
う　『般若波羅蜜多心経幽賛』
え　『大乗百法明門論』
お　『大乗法苑義林章』

これらの典籍の多くは、法相宗の開基、窺基の著述である。なかでも『成唯識論』と『般若波羅蜜多心経幽賛』からの引用が多く認められたことは注目される。AY で注釈が挿入された部分は十波羅蜜に関する箇所であり、唯識学に基づく理解として『般若波羅蜜多心経幽賛』が引用されたものと理解される。

見出された法相宗典籍から言えるのは、翻訳者・勝光闍梨都統は、ウイグル仏僧でありながら、伝統的な法相宗教義に通じており、彼の手元には法相宗の典籍が備わっていたであろうことが推測される。

以上の成果の概要については、以下の論文で報告した。

橘堂晃一「古テュルク語訳『慈恩伝』研究の現在地と新視座」、近本謙介・影山悦子（編）『玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本』臨川書店、2023 年、307−340 頁。

新たに作成した校訂テキストと訳注については、今後学術雑誌で発表していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Koichi Kitsudo	４．巻 43
２．論文標題 Uyghur Inscriptions on the Wall Painting of Bezeklik Grottoes in the Serindia Collection of the National Museum of Korea (Korean).	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Ancient Central Asian Writings in the National Museum of Korea II - Written Materials Excavated from the Tarim Basin (Korean).　日帝強占期資料調査報告	６．最初と最後の頁 112-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Koichi Kitsudo	４．巻 43
２．論文標題 Bezeklik Mural Fragments (bon 4058) with Restored Chinese Character Inscriptions in the National Museum of Korea (Korean).	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Ancient Central Asian Writings in the National Museum of Korea II - Written Materials Excavated from the Tarim Basin (Korean).　日帝強占期資料調査報告	６．最初と最後の頁 180-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Koichi Kitsudo and Imre Galambos	４．巻 73
２．論文標題 The Story of Shunzi in Old Uyghur	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Acta Orientalia Hung.	６．最初と最後の頁 451-466
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1556/062.2020.00020	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Koichi Kitsudo
２．発表標題 Interpretation of the Hell Scenes in Subashi East Temple Documented by the First Otani Expedition.
３．学会等名 IABS (International Association of Buddhist Studies) XIXth Congress（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Koichi Kitsudo
２．発表標題 Maitreya dwelling on the top of Mt. Sanwei: Transmission of a Buddhist image of the Song Dynasty
３．学会等名 Dunhuang & Silk Road Seminar Series, Michaelmas 2020, Cambridge（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 橘堂晃一
２．発表標題 銘文と写本の間―大谷探検隊将来資料を中心に―
３．学会等名 第74回　印度学仏教学会（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計3件

１．著者名 Mustafa S. Kacalin, Koichi Kitsudo	４．発行年 2022年
２．出版社 Turk Dili Yayinlari	５．総ページ数 319
３．書名 BES BALIKLIKLI SINGKO SELI TUTUNG　ANISINA ULUSLARARASI ESKI UYGURCA CALISTAYI BILDIRILERI	

１．著者名 近本謙介、影山悦子、荒川正晴、吉田豊、エリカ・フォルテ、宮治昭、佐野誠子、濱田瑞美、小野嶋祥雄、荒見泰史、橘堂晃一	４．発行年 2023年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 370
３．書名 玄奘三蔵がつなぐ中央アジアと日本	

１．著者名 吐送江・依明、橘堂晃一（他）	４．発行年 2024年
２．出版社 甘粛文化出版社	５．総ページ数 487
３．書名 海外回鶻学研究訳文集（一）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関